

この子

樋口一葉

青空文庫

くち 口に出して私が我が子が可愛いといふ事を申したら、嘸皆様は
 おほわら 大笑ひを遊ばしませぬ、それは何方だからとて我が子の憎い
 あそ ありませんもの、取たてゝ何も斯う自分ばかり美事な寶を持つて
 とり 居るやうに誇り顔に申すことの可笑しいをお笑ひに成りませぬ、
 ほこ がほ まを 居るやうに誇り顔に申すことの可笑しいをお笑ひに成りませぬ、
 わたし くち だ だから私は口に出して其様な仰 山らしい事は言ひませぬけれ
 こゝろ ど、心のうちではほんに可憐いのでありませぬ、掌
 あは をが 合せて拜まぬばかり辱ないと思ふて居りまする。
 わたし このこ 私の子は言はゞ私の爲の守り神で、此様な可愛い笑顔をして、
 むしん あそび 無心な遊をして居ますけれど、此無心の笑顔が私に教へて呉れ
 こゝろ ました事の大層なは、残りなく口には言ひ盡くされませぬ、學

校くかうで讀よみました書物しよもつ、教師けうしから言いひ聞きかして呉くれました様さま
 々〃の事ことは、それはたしかに私わたしの身みの爲ためにもなり、事ことある毎ごとに思おも
 ひ出だしてはあゝで有あつた、斯かうで有あつたと一いち々く顧かへりみられます
 けれど、此このこ子の笑顔ゑがほのやうに直接ぢかに、眼まのあたり前まへ、かけ出す足あしを止とゞ
 めたり、狂心くるこころを静しづめたはありませぬ、此このこ子が何なんの氣きも無なく小
 豆枕まくらをして、兩手りやうてを肩かたのそばへ投なげ出して寢入ねいつて居ゐる時ときの其
 顔かほといふものは、大學者だいがくしやさまが頭つむりの上うへから大聲おほごゑで異見いけんをし
 て下くださるとは違ちがふて、心しんから底そこから沸わき出すほどの涙なみだがこぼれて、
 いかにか強情がうじやう我がまんわたしの私わたしでも、子供こどもなんぞ些ちつとも可愛かあいくはあり
 ませんと威張みばつた事ことは言いはれませんかつた。
 昨年さくねんの暮押くれおしつまつてから産聲うぶごゑをあげて、はじめこのあかて此赤こゝろい

顔かほを見みせて呉くれました時とき、私わたしはまだ其時分そのじぶん宇宙うちうに迷まよふやうな心こ
 ころもち

持もて居ゐたものですから、今思いまおもふと情なさけないのではありますけれ

ど、あゝ何故丈なぜぢやうぶ夫うまで生うまれて呉くれたらう、お前まへさへ亡なくなつて呉くれた

なら私わたしは肥立次第ひだちしだいじつか實家かへへ歸かへつて仕舞しまふのに、こんな旦那様だんなさまのお

傍そば何なにかに一いつ時ときも居ゐやしないのに、何故なぜまあ丈夫ぢやうぶで生うまれて呉く

たらう、厭いやだ、厭いやだ、何どうしても此縁このえんにつながれて、これから

の永世ながらくを光ひかりも無ない中うちに暮くらすのかしら、厭いやな事ことの、情なさけない身みと

此このやうな事ことを思おもふて、人ひとはお目出めでたうと言いふて呉くれても私わたしは少すこし

も嬉うれしいとは思おもはず、只々ただ自じ分の身みの次第しだいに詰つまらなくなるをば

かり悲かなしい事ことに思おもひました。

それですが彼あの時分じぶんの私わたしの地位ちゐに他ほかの人ひとを置おいて御覽ごらんじろ、そ

れは何んな諦めのよい悟つたお方にしたところが、是非此世の中
 は詰らない面白くないもので、随分とも酷い、つれない、天
 道様は是か非かなど、いふ事が、私の生意氣の心からばかりで
 は有ますまい、必ず、屹度、何方のお口からも洩れずには居りま
 すまい、私は自分に少しも悪い事は無い、間違つた事はして居な
 いと極めて居りましたから、すべての衝突を旦那さまのお心
 一つから起る事として仕舞つて、遮二無二旦那さまを恨みました、
 又斯ういふ旦那さまを態と見たてゝ私の一生を苦しませて下
 さるかと思ふと實家の親、まあ親です、それは恩のある伯父様で
 すけれども其人の事も恨めしいと思ひまするし、第一犯した
 罪も無い私、人の言ふなり温順しう嫁入つて來た私を、自然と此

様な運うんこしらに拵おへて置いて、盲者めくらを谷たにつきへ擠おとすやうな事ことを遊あそばす、神かみ様さまといふのですか何なんですか、其方そのかたが實じつに恨うらめしい、だから此こ世のよは厭いやなものと斯かう極きめました。

負まけない氣きといふはいゝ事ことで、あれで無なくてはむづかしい事ことを遣やりのける譯わけには行ゆかぬ、ぐにやゝ柔やはらかい根こんじ性やうばかりではいついつひとひとが海鼠なまこのやうだと斯かう仰おつしやるお方かたもありまするけれど、それも時ときと場合ばあひによつたもので、のべつに勝氣かちきを振ふり廻ましても成なりますまい、其そのうちにも女をんなの勝氣かちき、中なかへつゝんで諸事しよじを心こゝろ得えて居ゐたら宜よいかも知しれませぬけれど、私わたしのやうな表おもてむきの負まけるぎらひは見る人ひとの目めからは淺あさましくもありましたやう、つまらぬ妻つまを持もつたものだといふ感かんは良人をつとの方ほうに却かへつて多おほくあつたので御座ござり

ましやう、で御座いますけれど私に其時自分を省る考へは出
せぬゆゑ、良人のこゝろを察する事は出来ませぬ、厭な顔を遊ば
せば、それが直ぐ氣に障りまするし、小言の一つも言はれましや
うなら火のやうに成つて腹だゝしく、言葉返しはつひしか爲ま
せんかつたけれど、物を言はず物を喰はず、随分婢女どもには
八つ當りもして、一日床を敷いて臥つて居た事も一度や二度で
は御座りませぬ、私は泣虫で御座いますから、その強情の
割合に腑甲斐ないほど搔卷の襟に喰つて泣きました、唯
々口惜し涙なので、勝氣のさせる理由も無い口惜し涙なのでし
た。

よめい
嫁入つたは三年の前、其當座は極仲もよう御座いましたし

雙方さうほうに苦情くじやうは無なかつたので御座ございますけれど、馴なれるといふ
 は好よい事ことの悪わるい事ことで、お互たがひ我わがまゝの生き地ぢがで出まり参まります、諸しよよ
 慾くが沸わくほど出でて参まりますから、それはふそく不足ふそくだらけで、そ
 れに私わたしが生な意まい氣きですものだからつひこころ心こころ安やすだてに且だんな那なさま
 が外そとで遊あそばす事ことにまくちで口くちを出だして、何どうも貴あなた郎わたしは私わたしにかだくし立だを
 遊あそばして、外そとの事ことといふと少すこしも聞きかせて下くださらぬ、それはお隔へだ
 て心こころだと言いつて恨うらみまなすと、何なにそんな水みづ臭くさい事ことはしなない、何
 も彼かも聞きかせるであひてはないかと仰おつしやつて相あひて手にわらせわらずに笑わらつていら
 つしやるのです、ありかく隠かくしてお出い遊あそばすのは見みえみすみいて居を
 りますし、さあ私わたしの心こころはたひとまりひとません、一ひとつを疑うたがだ出だすと十とうも二
 十じふも疑うたがだはうそしくなおもつて、朝あけ夕くれ旦また暮またあれ又またあんな嘘うそと思おもふやうになり、

何なんだか其處そこが可笑をかしくこぐらかりまして、何どうしても上じやうず手に思おも
 ひとく事ことが出来できませんかつた、今いまおもふて見みると成なるほど隠かくしだ
 ても遊あそばしましたらう、何なんと言いつても女をんなですもの口くちが早はやいに依よつ
 てお務つとめ向むきの事ことなどは話はなしてお聞きかせ下くださるわけには行ゆきます
 まい、現げんに今いまでも隠かくしていらつしやる事ことは夥おびたゞしくあります、それ
 は承しょうち知ちで、たしか左さう様しと知しつて居をりまするけれど今いまは少すこしも恨うら
 む事ことをいたしません、なるほど此この話はなしを聞きかして下くださらぬが旦だ
 んなさま 那んな様の 價しんしやう 値ちで、あれ位くらゐ私わたしが泣ないても恨うらんでも取とり合あつて下くださ
 らなかつたは旦だん那んな様さまのおえらいので、ああの時代じだいのやうな蓮はすは葉はな
 私わたしに萬まん一いちお役やく所しよの事ことでも聞きかして下くださらうなら、どのやうの
 つま 詰つま 事ことを仕し出でかすか、それでなくてさへ隨ず分ぶん出で入いりの者ものの手てな

どを假りて、私の手もとまで怪しい遣ひ物などをよこして、斯う
 いふ事情で酷く難儀をして居ります、此裁判の判決次第で
 生死の分け目に成りますなど、言つて、原告だの被告だのと
 いふ人が頼み込んで來たも多くあつたれど、それを私が一切受
 附けなかつたは、山口昇といふ裁判官の妻として、公
 明正大に斷つたのでは無く、家内の揉て居るに其やうの事
 を言ひ出す餘地もなく、言つて面白くない御挨拶を聞くより
 か黙つて居た方がよつほど洒落て居るといふ位な考へで、幸ひに
 賄賂の汚れは受けなくて済んだけれど、隔ては次第に重なるばか
 り、雲霧がだんだんと深くなつて、お互ひの心の分らないもの
 に成りました、今思へばそれは私から仕向けたので、私の仕様が

わる
悪かつたに相違無く、旦那様のお心を何時とは無しにぐれさせま
したは私が心の行き方が違つた故と今ではつく／＼後悔の涙が
こぼれまする。

ぜつちやう
絶頂に仲の悪かつた時は、二人ともに背き背きで、外へい
らつしやるに何處へと問ふた事も無ければ、行先をいひ置かれ
る事も無い、お留守に他處からお使ひが來れば、どんな大至急
要用でも封といふを切つた事は無く、妻とは言へ木偶がお
留守居して居るやうに受取一通で追拂つて、それは冷淡
に投げて置いたものなれば、旦那さまの御立腹は言はでももの事
はじめは小言を仰しやつたり、異見を遊ばしたり、諭したり、慰
めたり遊ばしたのなれど、いかにも私の強情の根が深く、隠

しだてを遊ばすといふを楯に取つて、ちつとやそつとの優しい言
 葉ぐらゐでは動きさうにもなく執拗ぬきしほどに、旦那さま呆れ
 て手をば引き給ふ、まだ家内に言葉あらそひの有るうちはよき
 なれども、物言はず睨め合ふやうに成りては、屋根あり、天
 井あり、壁のあると言ふばかり、野宿の露の哀れさにまさつ
 て、それは冷たい情ない、こぼれる涙の氷らぬが不思議で御座り
 ます。

おも 思へば人は自分勝手なもので、よい時には何事の思ひ出しも
 ありませぬけれど、苦しいの、厭のと言ふ時に限つて、以前あつ
 た事か、これから迎へる事についてか、大層よさうな、立派
 さうな、結構らしい、事ばかり思ひます、左様いふ事を思ふに

つけて現在げんざいの有さまありが厭いやで厭いやで、何どうかして此このなか中なかをのがれた
 い、此このきづな絆なを断たちたい、此こゝ處ところさへ離はなれて行いつたならば何どんな美うつく
 しく良いとい處ところへ出でられるかと、斯かういふ事ことを是ぜ非ひとも考かんへます、で
 御座ございますから、私わたしも矢張やつぱりその通とほりの夢ゆめにうかれて、此こん様んな不ふ
 運うんで畢をはるべきが天縁てんえんでは無ない、此家こゝへ嫁入よめいりせぬ以前いぜん、まだ小
 室むろの養女やうちよの實子じつしで有あつた時ときに、いろ／＼の人ひとが世話せわをして呉くれ
 て、種々いろ／＼の口々くち／＼を申まう込んで呉くれた、中なかには海軍かいぐんの潮うしほ
 田だといふ立派りつぱな方かたもあつたし、醫學士いがくしの細井ほそゐといふ色白いろじろの人ひと
 にも極きまりかゝつたに、引違ひきちがへて旦那様だんなさまのやうな無口むくちさまへ
 嫁入よめいつて來きたは何どうかいふ一時いちじの間違まちがひでもあらう、此間違このまちがひ
 を此このまゝに通とほして、甲斐かひのない一いつしやう生うを送おくるは眞實しんじつ情なさけない事こと

かんがと考へられ、わがみこころをため直さうとはしないで人ごとばかり恨めしく思はれました。

其やうな詰らぬ考へを持つて、詰らぬ仕向けを致しまする妻へ、何のやうな結構な人なればとて親切で對はれましやうか、お役所から退けてお歸り遊ばすに、お出むかへこそ規則通り致しまするけれど、さし向つては一言の打とけたお話しも申上げず、怒るならお怒りなされ、何も御隨意と木で鼻をくゝるやうな素振をして居ますに、旦那さま堪へかねて、ふいと立つて家をば御出あそばさるゝ、行先は何れも御神燈の下をくゞるか、待合の小座敷、それをば口惜しがつて私は恨みぬきましたけれど眞の處を言へば、私の御機嫌の取りやうが悪くて、家のうちに

は不愉快で居たゝまれないからのお遊び、こんな事をして良人を放蕩に仕あげて仕舞ふたのです、良人は美事家を外にするといふ道樂者に成つて仕舞ひました。

旦那さまだとして金満家の息子株が藝人たちに煽動られて、無我夢中に浮かれ立つとは事が違ふて心底おもしろく遊んだのではありますまい、いはゞ疝癩抑へ、憂さ晴らしといふやうな譯で、御酒をめし上つたからとて快くお酔ひになるのではなく、いつも蒼ざめた顔を遊ばして、何時も額際ひたひぎはに青い筋あをすぢが顯はれて居りました。

物いふ聲こゑがけんどんで荒らかで、假初の事にも婢女たちを叱り飛ばし、私の顔をば尻目にお睨み遊ばして小言は仰しやらぬな

れども其お氣むづかしい事と言ふては、現在の旦那様が柔和の
 相とては少しも無く、恐ろしい凄^{すこ}い、にくらしいお顔つき、其の
 方^{かた}の側^{そば}に私が憤怒^{ふんぬ}の相^{さう}で控^{ひか}へて居^ゐるのですから召使^{めしつか}ひはたまり
 ません、大方^{おほかた}一^{ひと}月^{つき}に二人^{ふたり}づゝは婢女^{はした}は替^{かは}りまして、其都度^{そのつど}紛^ふ
 んしつもの^{でき}失物^{しな}が出来^ますやら品物^{しなもの}の破損^{はそん}などは夥^{おびた}しい事^{こと}で、何^どうすれ
 ば此^{こん}様な^{ふにんじやう}に不^ふ人^{にん}情^{じやう}の者^{もの}ばかり寄合^{よりあ}ふのか、世間^{せけん}一^{いつ}體^{たい}が此^{この}様に^{やう}
 不^ふ人^{にん}情^{じやう}なものか、それとも私^{わたし}一人^{ひとり}を歎^{なげ}かせやうといふので、私^{わたし}
 の身^みに近^{ちか}い者^{もの}となると悉^{ことごと}く不^ふ人^{にん}情^{じやう}に成^なるのであらうか、右^{みぎ}を向^む
 いても左^{ひだり}を向^むいても頼^{たの}もしい顔^{かほ}をして居^ゐるは一人^{ひとり}も無^ない、あゝ厭^{いや}
 な事^{こと}だと捨^すてばちになりまして、逢^あふほどの人^{ひと}に愛^{あい}想^そをしやうで
 もなく、旦那^{だんな}様の^{さま}御^ご同^{どう}僚^{れう}などがお出^{いで}になつた時^じ分^{ぶん}も御^ご馳^ち走^{そう}は

すべて旦那さまのお指圖無いうちは手出しをもした事はなく、座敷へは婢女ばかり出して私は齒が痛い頭痛のと言つて、お客のあるなし有無にかゝはらず勝手氣儘の身持をして呼ばれましたからとて返事をしやうでもない、あれをば他人は何と見ましたか、定めしやまぐち山口は百年の不作だとも評して、妻たる者の風上へも置かれぬ女と言はれましてしやう。

あの頃旦那さまが離縁をやると一言仰しやつたが最期、私はきつとなにごとく屹度何事の思慮もなく暇を頂いて、自分の身の都合は棚へ上げて、此様な不運な、情ない、口惜しい身と天が極めてお置きなされるなら、何うでも宜しい、何となり遊ばしませ、私は私の考へ通りな事して、悪ければ悪くなれ、萬一よければそれこそ儲け

物のいふやうな無茶苦茶の道理を附けて、今頃私は何に成つて
 居ましたか、思へば身ぶるひが出ます、よく旦那様は思ひ切つ
 た離縁沙汰を遊ばさずに、能うも私を取止めて置いて下さつた、
 それはお瘡癩の募つて生やさしい離縁などをお出しなさるよ
 り何時までも檻の中へ置いて苦しませてやらうといふお考へであ
 ったか其處は解らぬなれども、今では私は何事の恨みも無い、
 旦那さまへ對して何事の恨みも無い、あのやうに苦しませて下
 さつた故今日の樂しみが樂しいので、私がいくらか物の解るやう
 に成つたもあゝいふ中を経た故であらう、それを思ふと私の爲に
 仇敵といふ人は一人も無くて、あの輕忽とこましやくれて世間
 へ私の身のあらを吹聴して歩いたといふ小間づかひの早も、

くちへんたぶ
 口返答ばかりして役たゝずであつた御飯たきの勝も、みんな私
 の恩人といふて宜い、今このやうに好い女中ばかり集まつ
 て、此方の奥様ぐらゐ人づかひの宜い方は無いと嘘にも喜んだ
 口をきかれるは、彼の人達の不奉公を私の心の反射だと悟
 つたからの事、世間に當てもなく人を苦しめる悪黨もなければ、
 神様だとして徹頭徹尾悪い事の無い人に歎きを見せるといふ事
 は遊ばすまい、何故ならば、私のやうに身の廻りは悉く心得ち
 がひばかりで出来上つて、一つとして取柄の無い困り者でも、心
 として犯した罪が無いほどに、これ此様な可愛らしい美しくい、
 此坊やをたしかに授けて下さつたのですもの。

このぼう
 此坊やの生れて來やうといふ時分、まだ私は雲霧につゝま

れぬいて居たのです、生れてから後も容易には晴れさうにもしな
 かつたのです、だけれども可愛い、いとしい、といふ事は産聲
 をあげた時から何故となく身にしてみても、いろいろ負け惜しみも言
 ひましやうけれど、そつくり誰れかゞ持つて行くだけでも成つたら
 わたし強情を捨て、取つて、此子は誰れにも指もさゝせぬ、
 私は強情を捨て、取つて、此子は誰れにも指もさゝせぬ、
 これは私の物と抱きしめたで御座りましやう。

旦那さまの思ひも、私の思ひも同じであるといふ事は此子が抑
 も教へて呉れたので、私が此子をば抱きしめて、坊は父様の物
 ぢやあ無い、お前は母様一人のだよ、母さまが何處へ行くにし
 る坊は必らず置いては行かない、私の物だ私のだとして頬を吸ひま
 すと何とも言はれぬ解けるやうな笑顔をして、莞爾々々とします

様子やうすの可愛かあいい事こと、とてもく、旦那様だんなさまのやうな邪慳じやけんの方かたのお子こ
 ではない、これは私わたしひとりひとりの物ものだと斯かう極きめて居ゐまするに、旦那だんなさま
 まが他處よそからでもお歸かへりになつて、不愉快ふゆくわいさうなお顔かほつきで此こ
 子れの枕まくらもとへお坐すわり遊あそばして、覺束おぼつかない手てつきに風車かざぐるまを立た
 て、見みせたり、振りつゞみなどを振ふつてお見みせなされ、一家いっかの内うち
 に我われを慰なぐさめるは坊主ぼうず一人ひとりだぞとあの色いろの黒くろいお顔かほをお摺すり寄よせ遊あそ
 ばすと、泣なくかしら恐おそろしがるかしらと見みて居ゐますに、いかにも
 嬉うれしい顔かほをして莞爾にこ々々／＼と私わたしに見みせた通とほりの笑ゑみを見みせるでは御ご
 座ざいませぬか、或あるときだんな、旦那だんなさまは、髻ひげをひねつてお前まへも此この子こが可か
 愛あいいかと仰おつしました、當あたり然まへで御座ございます、とてつんと致いた
 して居をりますと、それではお前まへも可愛かあいいと例いっもに似にぬ戲言おどけを仰おつし

やつて、高たか聲こゑの大おほ笑わらひを遊あそばした其そのお顔かほ、此これ子が面おもざしに争あらそ
 はれないほど似にた處ところが御座ございました、私わたしは此これ子が可か愛あいいのですも
 の、何どうして旦那だんな様さまを憎にくみ通とほせましやう、私わたしが善よくすれば旦那だんな
 さまも善よくして下くださります、たとへには三み歳つご兒ごに淺あさ瀬せと言いひます
 けれど、私わたしの身みの一いつ生しやうを教をしへたのはまだ物ものを言いはない赤あかん坊ぼう
 でした。

青空文庫情報

底本：「樋口一葉全集第二巻」新世社

1941（昭和16）年7月18日発行

1942（昭和17）年4月10日再版

底本の親本：「校訂一葉全集」博文館

1897（明治30）年1月9日発行

1897（明治30）年6月再版

初出：「日本之家庭」

1896（明治29）年1月

※編者による脚注は削除しました。

入力：万波通彦

校正：Juki

2014年9月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

この子

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>